

石黒信由考案

江戸時代の測量器具公開へ

新湊の「軸心磁石盤」市に寄託



青木さんが新湊市へ寄託した信由考案の精巧な軸心磁石盤

新湊市朴木、団体職員、青木一彦さん(三)は二十七日までに、同市へ石黒信由(一七六〇―一八三六年)考案の江戸時代の測量器具「軸心磁石盤」と朴木村の半賣割付状を寄託した。磁石盤は土地や道路の測量に威力を発揮したもので、市は十一年秋完成の市博物館に展示する。

青木家は村肝いりを務めた旧家で代々、太兵衛を名乗り、文久元年(一八六一)旧射水郡縄張役になり測量を手掛けた。寄託された磁石盤は、加越能三州郡分略絵図などを残した信由考案の精巧な測量器具。大きさは横六十センチ、幅高きとも四十センチほど。方角を図る見通し穴のある持ち手が付き、精度を高めた

め大小二個の磁石を備え、三六〇度自盛りが刻まれている。同種の磁石盤は県内に十台ほど残り、新湊では信由関係の史料を集めた高樹文庫内の鳥取孝太郎さん(元富山大教授、故人)のコレクションにも同じ磁石盤があり、二つ目の保存、展示となる。鳥取コレクションの磁石盤は県文化財に指定されている。市教委では「青木家は信

由のひ孫、信基から慶応三年(一八六七年)に敦賀一程野湖運河計画の測量協力を依頼されている。都合で測量には加わらなかったが、高い技術評価を受けていたことの裏付けになる」と話している。年貢割付状は寛文十年(一六七〇年)に加賀藩が領内の全村に発給したもので、村御印として大切に保管されてきた。